

翻 訳

マックス・ウェーバー

『大 統 領』

山 田 高 生 訳

凡 例

- 一 この翻訳の底本は、Max Weber, *Der Reichspräsident* (Februar 1919), in: *Gesammelte Politische Schriften*, 2. Aufl., hrsg. v. Johannes Winckelmann, Tübingen 1958, S. 486—489 による。
- 二 訳文中「」型括弧は、底本では「」型括弧である。
- 三 訳文中（ ）型括弧は、すべて底本のままである。
- 四 訳文中〔 〕型括弧で囲んであるものは、通読の便宜のため訳者が挿入したものである。

初代大統領は、国民議会によって選ばれた。これからの大統領は、無条件に国民によって直接選ばなければならない。

マックス・ウェーバー『大統領』

ならない。その決定的な理由はつぎのごとくである。

1 連邦参議院<sup>ブンデスラート</sup>は、どのような名称で呼ばれようが、その権能がどのように改訂されようが、ともかくなんらかの形で新憲法のなかに引継がれるだろう。——なぜなら、統治権力と邦権力の担い手が、すなわち各々の自由邦の邦民によって任命された「邦」政府が、国の意思形成から締出される、とりわけ国の行政から締出されるなどということはまったくありえないことだからである。だから、仲介者の干渉なしに、あきらかに全国民の意思にもとづく国家元首を設けることがどうしても必要である。いたるところで間接選挙は排除されてきたが、この形式上最高の地位について間接選挙がそのまま続けられるべきだろうか。もしも間接選挙が続けられるなら、それは議員の官職取引のために利用され、民主主義の原則を嘲笑するという印象を与えるだろう、そして国の信用を全面的に失墜させること受合いである。

2 大統領は、何百万もの票にバック・アップされている。したがって大統領だけが、社会化を軌道にのせる権威を持つことができる。法律の条項では何事もなし得ないが、厳格な統一的行政によってすべてをやり遂げることができるからである。社会化とは、すなわち行政である。止むを得ない財政上の措置として社会化を行なうにすぎないか、あるいは、社会民主主義的な意味で経済の変革として社会化を進めようとするのかどうかということはこの際どうでもよいことである。将来の経済秩序を確立することは憲法の課題ではない。憲法は、行政にかかわるすべての課題にたいして自由な進路と可能性を作ってやりさえすればよいのだ。将来の経済秩序にたいしても亦然り。社会民主党は、小市民的で似而非民主主義的な間違えた考えに惑わされて、このような必要に目をつぶらないでほしいものだ。むしろ社会民主党は、つぎのことをよく考えてもらいたい。すなわち、しばしば

論議された大衆の「独裁政治」は、まさに「独裁者」を必要とすること、つまり大衆が自ら選び、その信頼に依  
えていゝるあいだは服従する信任者を必要とすること、これである。最高権力が合議制であるばあいには、当然、  
いくつかの大きな邦と同様にいくつかの大きな政党がそれぞれ自分たちの代表者をその中へ送り込むことを要求  
するだろう。あるいは、議会選出であるばあいには、彼はフランスの大統領のように、みじめな無力に悩まされ  
ることになるだろう。これらの両者とも、ただの一度も行政にあの統一をもたらすことはできないのである。し  
かもあの統一がなければ、わが国経済の再建は、どのような土台のうゑに築かれようとも不可能である。大統領  
には、法律を侵害したり、独裁的に統治しようとするどんな試みにも、「絞首台と縄」がいつも眼前に吊下つて  
いることを解らせるようにしておかねばならない。人民投票に訴えていっさいの旧勢力の復活を阻止するため  
は、場合によっては、皇族も縮出さなければならぬ。だが、大統領の地位は、一本立ちして民主主義の土台の  
うゑにしつかりと据えられなければならないのである。

3 国民による大統領選挙のみが、指導者選抜の機会を提供する。同時にこれは、かつての名望家的運営の色  
褪せた制度を克服する新しい政党組織を作出すきっかけを与えている。このような名望家的運営の制度がそのま  
ま存続するなら、政治的にも経済的にも前進する民主主義は、近き将来にその役割を終えてしまふだろう。これ  
までの選挙から明らかのように、いたるところで古い職業政治家連中は、政治的売れ残りのために選挙人大衆の  
与論に逆って大衆から信頼されている男たちを排除するのに成功している。もっとも優秀な人たちをいっさいの  
政治から徹底的に締め出したこと、これがその結果であつた。国の最高職員〔大統領〕の国民選挙のみが、ここ  
では通風弁を作出することができる。

4 比例選挙法の作用によって、このような必要はますます強まる。つぎの選挙では、今回の選挙で萌芽的に見られたものが姿を現わすだろう。すなわち、職業団体（家主、学士、サラリーマン、あらゆる種類の「会」）の圧力で、諸政党は、もっぱら票の獲得を目当てにその（職業団体の）常任書記をリストのトップに連ねざるを得なくなるだろう。かくて議会は、国民的政治など、「どうでもよい」ような人物が群がる団体、それどころか事実上経済的利害関係者の「強制的」命令にしたがって行動し、その首頭を取るような人物が群がる団体、すなわち、俗物どもの議会になる。——どんな意味でも、政治指導者の選抜の場になることはできないのである。この事実、ここで包み隠さずに述べておく必要がある。連邦参議院が議決を通じて首相（宰相）を広範囲にわたって拘束しているという事情と関連して、この事実は、議会そのものの純政治的意義が不可避的に制限されざるをえないことを意味している。けだし、議会の純政治的意義は、「連邦参議院と鈞合うための」民主的な国民の意思にもとづく平衡錘たるところにあるからである。

5 地方分権主義にたいして、統一国家の思想の担い手が必要である。純然たる地域政党がさらに発展していくかどうかはわからない。これを支持する与論はある。これは、多数派形成と内閣の構成のうえにいつまでもはね返ってくること必定である。国民選出の大統領を任命するさいの選挙運動は、そのような傾向が一方的に蔓延していくのを防ぐ役目を果たす。なぜなら、諸政党はこの選挙運動によって否応なしに国全体にわたって統一的に組織され、協調せざるをえないからである。これは、ちやうど国民選出の大統領が連邦参議院——これは残念ながら廃止するわけにはいかない——にたいし、国の統一という意味での平衡錘を対置するのと同様である。ただしこれは、圧制をもって各支邦を脅かすことを意味していないことは言うまでもない。

6 以前、官憲国家においては、究極的には議会の意義と水準を高めるために、議会多数派の権力強化を擁護しなければならなかった。しかし今日の状況はつぎのごとくである。どんな憲法草案でも、国民の多数にではなく、議員の多数派にたいする無謬性と全能へのまさしく盲目的な信仰にあふれている。すなわち、まったく非民主的な対極に走っているわけである。国民選出の大統領の権力は、いつでも制限されていなければならない。大統領は、時たま生ずる解決不能な危機的事態にさいし、（停止的拒否権と官僚内閣の任命によって）さらに国民投票の呼びかけによって国の諸機関に干渉することができにすぎない。このように制限されなければならないだろう。しかし大統領には、国民投票によって自分自身の地歩が与えられなければならない。さもなければ、議会が危機に直面した場合にはいつでも——少くとも四、五の政党が存在するところでは、そのような危機は珍しいことではないが——、国の全機構は動揺するからである。

7 国民選出の大統領のみが、ベルリンにおいてプロイセン邦の知事と並んで、純粹に許容されていること以外の役割を果たすことができる。各邦の政府は、したがってプロイセン邦の知事も、ほとんど全部の官職授与権を掌握するだろう。とりわけ国民と日常接触している全内務官僚、少くとも下級将校の任命権を掌握するだろう。それゆえ、全国民の選挙によらずに選出された大統領は、プロイセン邦の知事に比べてまさしく憐れな役割を演ずることになる。その結果、プロイセンの優勢は、ベルリンにおいて及びベルリンを通して国において、——地方分権主義の形をとるため——非常に危険な形で復活するだろう。

もしも議員が国の最高機関の選挙を手離したとしたり、上述のことはもとより明白である。だが、このような事態は起るにちがいないし、これを支持する動きも立止ったりなどしない。民主主義は、議会にたいす

マックス・ウェーバー『大統領』

るこのような煽動の武器をその敵の手に握らせてはいけない。議会主義を擁護するために適時に自己の権力を制限した君主は、もつとも上品に振舞っただけでなくもつとも賢く振舞ったわけだが、このような君主と同じように、議会は民主主義のマグナ・カルタを、すなわち指導者の直接選挙の権利を自ら進んで承認すべきである。内閣が議会の信頼と密接に結びついているときには、議会はこのことを後悔するには及ばない。というわけは、この国民選挙によって民主主義的な政党活動の傾向が著しく育ち、これが議会にも有効に作用するからである。議会のなかでの諸政党間の一定の勢力分布と提携とのもとで選出された大統領は、この勢力分布が変れば、たちまち政治的には廃人となる。国民選出の大統領は、行政及び官職授与権の長として（場合によっては）停止的拒否権、議会解散権、国民訊問権の保持者として、派閥への無気力な屈服ではなく自己の選んだ指導者への服従を意味する真の民主主義の守護神である。

解題

ここに訳出したマックス・ウェーバーの『大統領 (Der Reichspräsident)』なる論文は、当初、一九一九年二月二五日の『ベルリン取引所新聞 (Berliner Börsenzeitung)』に発表され、後に『政治論集』のなかに収録された。この時務論文が発表された二月二五日は、ヴァイマル国民議会においてエーベルトが初代大統領として選出されてからほぼ半月後で、国民議会の憲法草案審議第一読会が開始された翌日にあたる。見られるとおりウェーバーは、この小論において、議会選出の初代大統領にたいする批判の意をこめて、「人民投票的」大統領制が採用されねばならない根拠を当時のドイツの具体的状況に即して列挙している。ウェーバーは、これによって憲

法案案審議に影響を与えることを意図したと思われる。

ところで、国民議会が初代大統領を国民の直接選挙によらずに議会によって選出した背景には、この年のはじめにベルリンにおいて発生した大デモストレーションとこれに続くスバルタクス団にたいする血なまぐさい弾圧といった政情不安を理由に、国民議会が緊急臨時体制をとったという事情がある。さらに、社会民主党をはじめとする国民議会のメンバーの意識のなかには、帝政時代の議会軽視を裏返えしたような形で議会主義にたいする絶対的信仰のようなものがかなり強く支配していた。因みに、一九一九年夏、ヴァイマル憲法のなかに直接的国民投票による大統領制が採用された後でも、議会は、国をあげての選挙運動は却って政治的混乱をまねくという理由で、再び議会によってエーベルトを大統領に選出した。これにたいしウェーバーは、すでに大戦末期及びドイツ革命後に書かれた政治論文において、また国務大臣H・プロイスの私的な憲法案作成委員会において、連邦参議院の設置、議会の調査権と並んで人民投票の大統領制を強力に提案していた。これらの、一見無関係に見える提案は、ウェーバーの統一国家ドイツへの意思と、官僚制化と大衆民主主義化という情況認識のもとで統一されている。官僚制化と大衆民主主義的状况のもとでは、もはや単なる議会主義は消極的な政治を行ないうるにすぎず、なんらかの独裁政治が出現せざるを得ないことをウェーバーは鋭く見通していたと考えられる。官僚独裁が將軍デモギーか、あるいは、カリスマ的指導者の創出か、後期ウェーバーの政治的関心はこの点にあった。ウェーバーにおける機能主義的議会制論と強力なカリスマ思想から、彼の大統領制論は、ヴァイマル末期の大統領独裁を介してヒトラーのフュラー思想に道を開いたという議論があるが、ウェーバーの政治的意図そのものに即してみれば、大統領もそのうちに含むところの政治的指導者階層をできるかぎり合理的に形成することによ

マックス・ウェーバー『大統領』

って、すでに雪崩のごとく進行しはじめていた大衆社会的状況に対応しようとしていたと言えることができる。しかし、ウェーバーの意図したところの政治的指導者層の合理的形成のためのチャンスは、古い名望家の議会政治家の再現によって、この論文が書かれた時代にすでにいよいよ遠ざかりつつあり、しかもそれ以後の憲法政治的現実の発展は、ウェーバーの政治的意図からものはや橋渡しができないほど開いてしまったのである。

(一九七一・八)